

石のカタ古墳発掘調査概要

奈良国立文化財研究所
石のカタ古墳埋地説明会資料
1979年3月17日

- 1 所在地 奈良県奈良市山陵町、京都府相楽郡木津町
- 2 調査目的 日本住宅公団によるニュータウン造成工事に伴う古墳の範囲確認調査
- 3 事業主体 日本住宅公団、京都府教育庁、奈良県教育委員会
- 4 本古墳に関する従来研究

石のカタ古墳はその名の由来となった石室が高松塚古墳と同様のいわゆる横口式石室をむね終末期の古墳として有名である。築造年代は石室の型式から7世紀後半～8世紀初頭に位置づけられている。しかしそのほかには年代を定める手がかりは少なく、決め手となる副葬品も石室内部で比較的古い時代に盗掘にあったため、わからず、また何の伝承もない。この古墳は奈良県の近世史料に描かれているが、学界に広く知られるのは大正年間に長江正一氏や梅原末治博士が京都府の古墳として紹介したことによる。長江氏は古墳の見取図と大半が埋没した石室の実測図を載せ、墳形は方墳だが上円下方形ともいべき古墳と述べた(考古学雑誌 11-1)。梅原博士は長江報文を踏まながら、墳形は方墳であること、葺石が存在する可能性を指摘した(京都府史蹟勝地調査会報告 第6冊)。昭和43年の「奈良史考」編は本墳を径約16m、高さ約2mの円墳として紹介するとともに床面の一部を図化した石室の実測図と計測値を明らかにした。また奈良県教育委員会には「奈良県の古墳Ⅱ」(昭和49年)は墳丘に関する最近の考之を改め、再び方墳であるとした。

5 今次の調査と成果

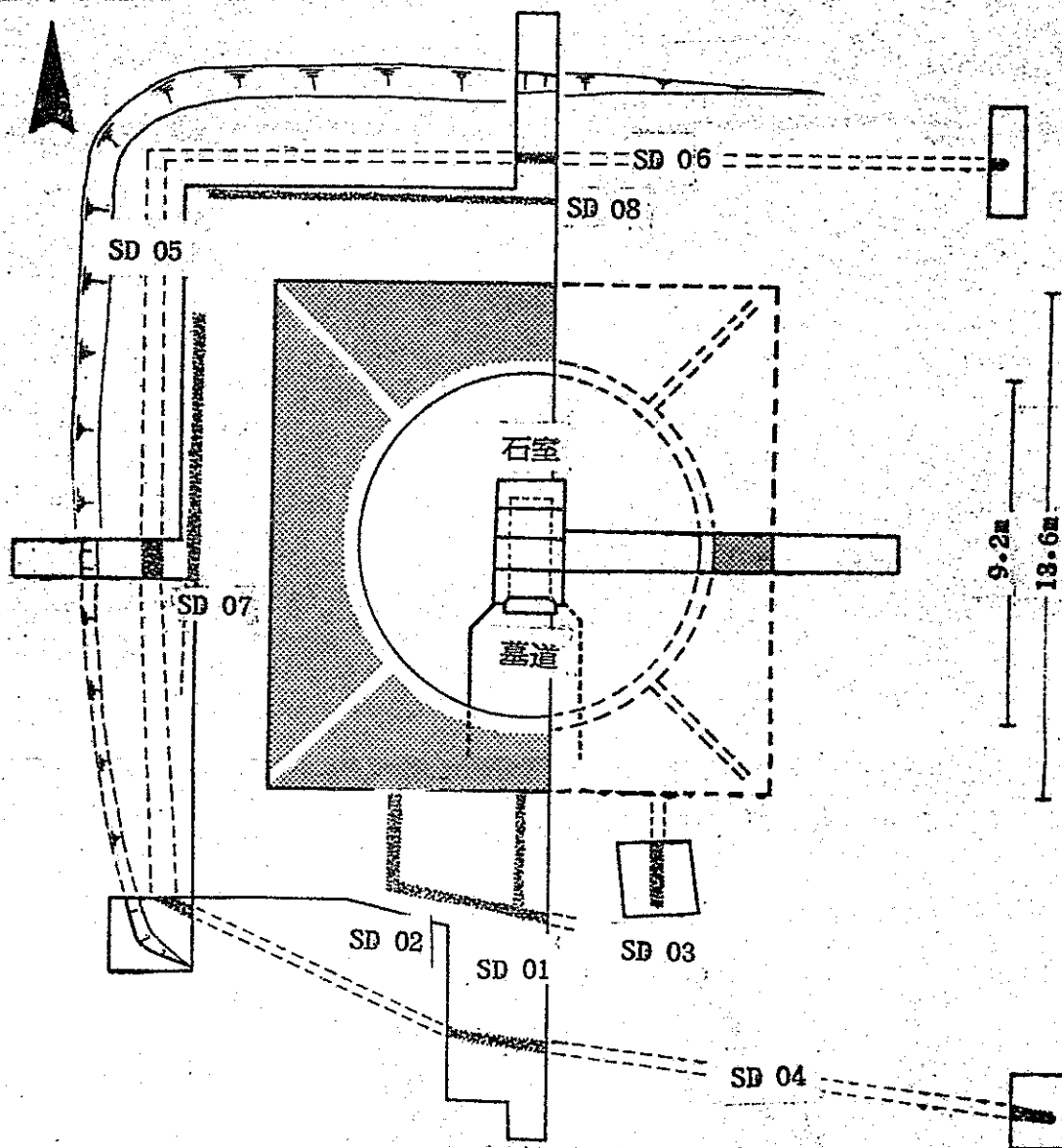
今回の調査の目的が古墳の規模を確認することから、従来不詳であった墳丘と実測。その後墳丘の裾取りに調査の重点をおき、墳丘と周囲にトレンチを設け、その構造と規模を確認することにした。その結果、本古墳が葺石をもつ上円下方墳であること、古墳の周囲に排水施設を設けることなどを明らかにした。

- a) 立地；南北方向にのびる丘陵の東側斜面を避けて、尾根を下った棚状地を整地して墳丘を築く。
- b) 墳丘；墳丘は2段に築成し、第1段は方形に、第2段は円形に築く。規模は第1段が一辺13.6m、第2段が径約9.2m。高さは第1段が約1.2m、第2段が約1.3mである。また墳丘全体を河原石で葺くが第2段はすべて落下している。第1段斜面は河原石を小口積みとし、踏石のみはすべて立てる。ただし墳丘の南と東側では石積がたわんでせり出し、踏石が前面に倒れかかっている。第1段上面の各辺コーナーは中心に向って水みちを設け、石を横に立てて溝状に区画する。
- c) 石室；石室は墳丘のほぼ中央に位置する。凝灰岩の板石を組み合わせ、主軸は南北方向である。石室は中世の盗掘によって天井石が抜かれ、土砂によって埋没していた。清掃の結果、石室の内法は奥行2.6m、幅1.04m、側壁の高さ約1.06m、天井部は屋根形に0.1m盛り込む。

石室を構築する石は床と天井部が各4、側壁が3、奥壁と扉石各1の計16枚で、床石と天井石は目地を合わせる。石室内は中世に完璧に盗掘され、棺や副葬品は持ち出され、床面に流入土から金、銀、玉、銀装唐様太刀の鞘、貴金具、金箔、漆の断片などを検出した。

d) 墳丘下の暗渠； 墳丘下には3系の石積暗渠がある。SD 01は石室の下の南にのびる暗渠で、墳丘南辺の中矢にある。このSD 01を中心に東西各3.5mにSD 02、SD 03がある。3系の暗渠はほぼ末端を揃えるがSD 02は墳丘裾から南約3mで東折し、SD 01の先端と横切って止まる。

e) 外部施設； 墳丘外周には数条の石積暗渠がある。墳丘構築に先立ち整地作業により、旧地形が高い西と北には法面ができる。この法面の下端に接して開渠風のSD 04、05、06が墳丘を大きく馬蹄形にとり囲む。このSD 05、06と墳丘の間にも南北暗渠SD 07と東西暗渠SD 08がある。SD 07、08の周囲はバラス敷きとする。これらの暗渠は雨や地下水、特に尾根筋からの水に備えた施設である。地形は西、北が高く、東南に下がる。従って尾根筋からの水はSD 04、05、06で墳丘の東南、東北に導き、墳丘周囲はバラス敷きと一体となったSD 07、08によって排水する。さらに墳丘下はSD 01、02、03によって墳丘南に導き排水する三段構えの構造であった。



石のカラト古墳遺構配置図